



香川県教職員連盟機関誌
発行所: 香川県教職員連盟
発行者: 北村 顕吾

〒760-0004
高松市西宝町2丁目6番40号
香川県教育会館602号

TEL (087) 835-2721
FAX (087) 835-2723

毎月10日発行 定価1部50円
(年間1,000円 送料とも)
会員の購読費は会費の中を含む

新時代における香川の教育のために



十二月七日(火)、主に香川県選出の国会議員の方々に対し、香川県の状況報告ならびにそれに関わる要望を行った。香教連から北村顕吾委員長、高木俊彦事務局長が参った。また、村松宏晃全日教連事務局次長(香教連副委員長)も同行した。未来を担う子ども

たちのため、それを支えている先生方のため、「令和の日本型学校教育」の確実な構築のための予算確保や対策・環境整備、円滑に教育活動が行うことのできるよう国家公務員法の改正に伴う地方自治体での条例改正になるよう働きかけていただくこと等についてお願いした。また、香教連で行ったアンケート結果等を踏まえ、香川県の実態や先生方からいただいた御意見を伝えるとともに、学校における働き方改革の現状や課題等についても御示唆いただいたり、さらに改善が図られるよう働きかけていただいたりすること等についてもお願いした。

要望内容として、
○二〇二六年度までに、小学校全学年の一学級三十五人以下学級が確実に実現されるよう、適切な教員配置を、推進・拡充すること
○小学校においてより充実した教育活動を行うために、教科担任制が円滑に実施されるよう、専科教員の配置を、推進・拡充すること



○GIGAスクール構想の本格実施にあたり、整備された端末等を円滑かつ有効的に活用することができるよう、GIGAスクール運営支援センターの整備の検討ならびにGIGAスクールサポーターやICT支援員の配置を、推進・拡充すること
○新型コロナウイルス感染症対策及び新しい時代の初等中等教育に対応するために、学校の実情



香教連は、結成四十七年を迎えた、子供中心の教育を目指し、健全なる批判力を持つ、県内最大の教職員団体です。

に応じた教員業務支援員(スクールサポートスタッフ)の配置を、継続して推進・拡充すること

○「学校における働き方改革」を実現するため、全県で共通化した総合型校務支援システムの導入や各学校および各教育関係機関において積極的に具体的な業務改善に取り組むよう、早急な環境整備の推進や対策を講じること

○中学校において、部活動指導体制の充実を推進し、部活動の質的向上を図るとともに、部活動を担当する教員の支援を行うために、部活動指導員の配置を継続して推進・拡充すること

○児童生徒の心身の悩みに、きめ細やかに対応するために、養護教諭の複教配置について、学校の実態や規模に応じて、適切な配置を推進すること

○配慮が必要な児童生徒に、個に応じた指導が行える通級指導教室の、さらなる通級指導教室の増設や通級指導に専属する教員の増員を図ること

○国家公務員法等の改正に伴い、定年延長制度が導入されることを踏まえ、円滑な教育活動の実施や学校経営等を鑑み、「役職定年制の導入」を適応しない等、職階や職責に関する事項等を慎重に検討し条例改正すること

○教職員がさらなる意欲をもって勤務できるとともに、香川に優秀な人材が確保できるよう、教職員給与等を増額すること
○国家公務員法等の改正に伴い、定年延長制度が導入されることを踏まえ、教員の勤務の特殊性等を鑑み、今後、教職員給与等の大幅な引き下げや退職手当の大幅な削減が行われることがないようにすること



温故知新

謹んで新春のお慶びを申し上げます。また、平素より香川県教職員連盟のために、温かい御理解・御支援を賜り、厚く御礼を申し上げます。

コロナ禍の中、日本のみならず世界中が未だ落ち着かない状況です。本日に一日も早い終息を切に願うばかりです。このような中でも、子どもたちに新しい時代に対応した教育を推進していくためには、慣例主義・既成概念にとらわれない、新しい時代に即した教育現場の環境整備や勤務環境の改善等が不可欠です。本年も積極的に内閣や国会、国県市町の各教育関係機関等に要望してまいります。そのためには、先生方のさらなる御理解と御協力が必要です。毎年申し上げておりますが、「どうせ変わる」から「変わらなければならない」という意識改革をし、当事者意識をもって実行することが重要です。

新しい時代を担う子どもたちのために、会員となって現場の声を届けてくださるようにならうが、小学校低学年のうちは量が多いと感じるメニューの日があり、かなり残るのではないかと心配に思ったことがあるのではないだろうか。でも各学校、各地域で作られている給食は、実に細かく量について考えられています。また、学年の発達段階に応じて量が違いますが、季節によっても違います。ですから、栄養面ではもちろん、子どもたちが食べられるよう、量もメニューも工夫していただいているというところは多いです。本当に有り難いことです。子ども一人が食べる分量はかなりの個人差があります。少食の子でもよも食欲旺盛な子どもが多い学校なら、簡単に食べさせるでしょう。そうでない場合は残るでしょう。一般的に指導していれば、そうなるだけの話です。(無理に食べさせることも、逆に無駄に残させることもできません。これらはどちらも問題です。)

食料不足の戦後間もない時代に教師をされていた世代の方々からすれば、あり得なかつた悩みだと思います。だから完全か余るかというようにこの自体は、あまり大きな問題ではないかと思っております。(余る分量を作らざるを得ない学校給食の法的な問題があるかもしれないからです。)

野口芳宏先生は次の言葉でまとめられています。「食の教育は、感謝で始まり感謝で終わる。」つまり、「いただきます」から「ごちそうさま」である。とおっしゃっています。「いただきます」は、頭上高くに位置されることで、神事に用いる言葉です。命を取り入れる行為といえます。「馳走」は、あれこれ走り回って世話を焼くこと。食材を育てるところから運搬・調理まで様々な手を渡して口に入る。そこに「御」と「様」という敬意を示す言葉が付く。とにかく、感謝に尽きるといっていいのでしょうか。食育では、ここを落とさないようにしなければなりません。例として「食べ物で遊ばない、粗末に扱わない、不平不満を言わない、つまずく、関わる人すべてが見たり聞いたりして嫌な思いをするようなことは避けるべきです。体調により御飯を残すのは仕方ない場合がありますが、食器に御飯粒がべったり残っているのは指導すべき事柄です。粗末に扱ったり、洗うのも大変だからです。給食に対する感謝の気持ちは、人に対する感謝の気持ちは育む貴重なものになっていっているのではないのでしょうか。(願)